思いやる気

野本 浩愼［愛媛県］

『先生、お元気ですか？私は現在、人の人生を応援する仕事をしています。あなたの座右の銘「思いやる気」を胸に抱きながら』

私は小学五年生から中学生にかけて学校を休みがちだった。どこかクラスに馴染めず、先生や同級生と関わる事が不安で苦しくなった。当時は不登校に対する認識も厳しく、怠けや甘えと捉える人もいて、自己嫌悪に陥り、両親にも心配をかけた。

そんななかで当時、唯一、夢中になれるものがプロ野球観戦だった。あるシーズンに愛媛出身のプロ野球選手が活躍していて、僕は中学二年生の十二月に思いきってファンレターを送った。

後日、ポストに一通の手紙が入っており、名字が見えた。「おおっ」一瞬、興奮した。ただ、よく見ると名まえが違う。学校の先生からだった。クラス担任ではなかったが、スポーツマンで爽やかな先生という印象を持っていた。手紙は「僕とキャッチボールをしませんか？」という内容だった。マジか。ファンレターを送った選手と同じ名字であることに僕は何か不思議な縁を感じた。

「ナイスボール！」時々、ミットに乾いた音が鳴り響き、先生が笑顔で応えてくれる。「あれ？なんか楽しいぞ」先生は仕事が終わるとほぼ毎日、自宅に来て近所の公園でキャッチボールをしてくれた。僕が野球好きなのを知ってくれていたのだ。

中学三年生になり、僕は学校を休まず通うようになっていた。いつの間にか僕の心の中にやる気が生まれていた。振り返ると、頑張っている姿を先生に見てほしかったのかもしれない。そして僕は無事に卒業し、先生は年度末に異動となった。先生とのキャッチボールは一年四カ月に及んだ。

『先生、私を救ってくれてありがとう。思いやりとやる気を合わせた「思いやる気」はしっかりと私の心に引き継がれています。またいつか、キャッチボールしましょう！』